

文教協会報

No.682

(令和6年2月)

まなびの泉
心のかよいあい

わくわく協働活動
ぬくもり
ふるさと・再見
声 こえ VOICE
～文教のまち 大垣～
ふるさと美術散歩⑥

総合的な学習の時間の充実を目指して……………2
笑顔で声を合わせて「トリックオアトリート!」(西幼稚園) ……3
「未来に繋げる」(宇留生小学校) ……………3
軽スポーツ「モルック」……………4
大垣市の教職員研修事業について……………5
水都大垣……………6
「ふるさと大垣科」と私 ……………7
文教協会 60周年記念事業に向けて……………8
大垣市守屋多々志美術館を訪ねて……………8



大垣市立北小学校児童の作品



総合的な学習の時間の充実を目指して

「総合的な学習の時間」の充実は、令和5年度「学校教育指導の方針と重点」で掲げているものの一つになります。児童生徒が主体的に学ぶ力が身に付けられるように、各校で毎年カリキュラムを見直し、活動の充実を図っています。

令和6年度4月に大垣市上石津地域の小・中学校5校が統合され、義務教育学校「上石津学園」が開校します。上石津学園では、「探究的な学びを身に付け、実践力・推進力を育てる総合的な学習の時間」を特色の一つとして掲げています。令和6年度の開校に向け、令和5年度も「総合的な学習の時間」に力を入れて実践を行っています。今回は、その実践の一つを紹介します。

上石津中学校での実践－3学年での縦割りグループでの交流会－

活動の流れ

- ・学年テーマに合わせて個人追究した内容を、3学年の縦割りグループ内で発表する。
- ・発表者は、他学年にも伝わるように発表し、発表を聞いたグループの生徒は、提案された内容について、それぞれの立場でコメントする。
- ・発表者は、コメントを受けて、自分の追究してきた内容を見直す。

【2年生テーマー地元、上石津を魅力的なまちにするために、自分にできることは何かー】

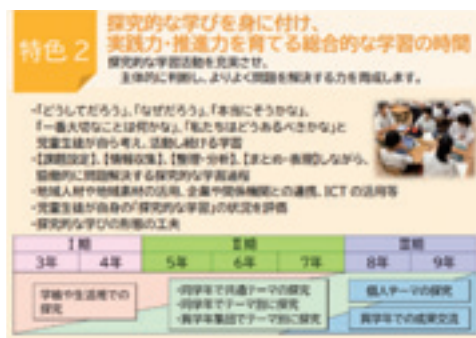


縦割りグループでの交流会の様子

（2年生Aさんの発表内容 概要）

- (1)大垣市の企業に関わる学習から、「地域へ貢献すること」、「新しい価値を創造すること」を学びました。
- (2)上石津地域にお世話になっている私たち中学生が、活動しないと地域は変わっていかないと考えます。
- (3)地域を盛り上げていくためには、上石津の魅力を生かしたまちづくりが必要です。上石津地域のよさは、「四季折々の自然」があることです。私は、文化的な面から、まちづくりに貢献していきたいです。その例として、上石津地域の自然を生かした小説づくりをしてみたいです。また、美術が好きなので、上石津地域の自然をテーマに絵画などを描いていきたいと思っています。
- (4)上石津地域ができることとして、移住体験プログラムを提案します。空き家を使った体験プログラムを実施し、気軽に上石津地域に来てもらえるとよいと考えます。

（以下略）



上石津学園で目指す総合的な学習の時間

発表者が身振り手振りを交えながら、伝えたい内容について力強く発表している姿が印象的でした。また、聞いている生徒も自分たちの追究したことと関連付けながら、コメントすることができ、次の追究につながる素敵な交流会となっていました。

（学校教育課 鈴木 宏教・鹿野 由美子・中川 由裕）



笑顔で声を合わせて「トリックオアトリート!!」

西幼稚園PTA会長 山田 知佳

今年度のPTA活動の目標は「笑顔あふれる 西幼っ子」です。西幼稚園の園児数が13人と少なく、なかなか大きな行事や取組を行うことはできません。その分、園児同士のつながりを感じながらたくさんの思い出を作り、その一つ一つが笑顔であふれるものとなるようにという思いが込められています。

10月には家庭教育学級の行事として「ミニハロウィンパーティー」を行いました。パーティーをより楽しむために、身に付けるマントを夏休み期間に親子で制作することになりました。自分たちの好きなデザインのマントを思い思いに作ることで、当日に向けての楽しみを一つ増やすことができたと思います。

ハロウィンパーティー当日、保護者の方に協力していただいて教室の飾り付けをし、自慢のマントを身に付けた子どもたちを迎えました。まずは、みんなで宝探しです。ペットボトルの蓋を宝に見立て、隠したそれらを探し出し、牛乳パックをリメイクしたミニバッグに入れてもらうというものでした。子どもたちはとても一生懸命に教室中を駆け回り、また、友達同士で協力しながらあっという間に全ての宝を見つけだしました。「こんなにたくさんみつけたよー。」と笑って教えてくれる子どもたちを見て、私たちもうれしくなりました。

その後、みんなで「トリックオアトリート!!」と声を合わせて先生からお菓子を受け取り、ハロウィンの雰囲気を楽しんでいました。最後に全員で撮った記念写真には、満面の笑みでお菓子を掲げている子どもたちの姿があり、先生や友達との素敵な思い出を残すことができました。

今後も子どもたちに寄り添い、成長を感じながら、笑顔あふれるような活動をしていきたいと思っています。



ミニハロウィンパーティーの様子

「未来に繋げる」

宇留生小学校 PTA会長 土屋 諭

今年度、宇留生小学校は創立150周年を迎えることができました。これもひとえに歴代の先生方や卒業生をはじめ地域の方々が苦勞を重ねて、歴史を紡いでいただけたおかげです。そのことに感謝するとともに、今年度もPTA活動を通じて、みんなで「うるうの未来を繋いでいこう」という想いでスローガンを「繋ごう うるうの未来 ～150th～」としました。

当PTAでは、このスローガンのもと、そして長く続いたコロナ禍での制限も撤廃される中で、子どもたちと地域みなさんと共に創立150周年の節目を一緒に祝い、喜びを共有できるような企画を考えておりました。そこで、7月23日に4年振りの開催となる地区の夏祭りに合わせ、スカイランタンと打ち上げ花火を企画しました。夏祭り当日は天候にも恵まれ、夏の夜空に「友達と仲良くできますように」「大会で優勝できますように」など子どもたちが願いを書いた500個のスカイランタンを浮かべました。また、200発以上の打ち上げ花火も皆さんに楽しんでいただけました。本当に多くの方々にご協力いただき、無事に終えることができました。

今年度「4年振りの〇〇」という言葉が本当によく聞かれる通り、長くさまざまな行事を行うことができませんでした。そのような中で開催できたこの夏祭りを通じて、久しぶりに多くの子どもたちの満面の笑顔を見ることができました。そして行事を通じ、社会福祉推進協議会をはじめ地区の多くの方々と協力関係を改めて築くことができました。このことはPTA活動の意義そのものだと感じております。子どもたちが地域の方々に見守られ、健やかに成長していくことが未来につながるのだと考え、これからも活動していきます。



夜空に浮かぶスカイランタン

軽スポーツ 「モルック」

1 はじめに

心と身体は互いに影響し合っており、体づくりとともに人とのつながりが、生涯にわたり健康であるために大切だと言われています。スポーツを通じて、活力のある社会を実現するための取組の一つとして、大垣市では軽スポーツの実施などをおして、コミュニティスポーツの充実を図っています。

2 軽スポーツとは

軽スポーツは、一般的なスポーツと比べて体への負担が少なく、ルールも簡単で、幅広い年齢層の方が一緒になって楽しめるスポーツです。軽スポーツには、モルック、ペタンク、タスポニー、グラウンドゴルフなどがあります。今回は、この中から「モルック」を紹介します。

3 モルックとは

平成8年（1996）に、フィンランドのカレリア地方の伝統的なキイッカ（kyykkä）というゲームを元にトゥオテレンガス（Tuoterengas）社によって開発されたスポーツです。とても簡単なルールで、老若男女問わず楽しめることから、母国フィンランドでは、サウナとビールを楽しみながらプレイされている気軽なスポーツです。近年、日本ではTV番組やSNSなどで取り上げられる機会が増えたことにより、急速に人気が高まっています。

4 モルックの楽しみ方

必要な道具、ルール、基本フォームを紹介します。

(1)道具

モルック：投げる棒のことをモルックと言います。下手投げで行うのが基本です。

スキttl：木製のピンのことをスキttlと言います。モルックを投げてスキttlを倒します。全部で12本あります。



モルックとスキttl

(2)ルール

2チーム以上で対戦します。モルックを投げて、スキttlの倒れ方で点数が決まります。1本が倒れた場合、書かれた点数が得点になります。複数本が倒れた場合、倒れた本数が得点になります。得点を加算していき、先に50点ピッタリになったチームの勝ちです。50点を超えた場合は、25点から再スタートとなります。

(3)基本フォーム

モルックの重心が安定するように下手で握り、ねらいを定め数回の素振りの後に投てきします。足を揃えたり縦に開いたりする投げ方、また、屈伸を利用したり腕の力だけで投げたりする投げ方があります。

5 おわりに

大垣市のスポーツ推進委員の活動において、モルックを普及していこうと考えています。

体への負担が少なく、コミュニケーションしながら、みんなで楽しめる北欧生まれのモルックに挑戦してみてください。

（社会教育スポーツ課 阪本 千裕）



モルックを投げる様子

大垣市の教職員研修事業について

1 はじめに

～「新たな教師の学び」とは～

社会が急激に変化する時代において、子どもたちが活躍する上で必要な力を身に付けるためには、教師もさまざまな社会的変化に対応した教育を実現することが求められます。

2022年12月、中央教育審議会が取りまとめた答申に「研修観の転換」が盛り込まれました。子どもの教育を変えていくためには、教師自身の学びも変わる必要があります。

時代の変化に対応して求められる資質・能力を身に付けるためには、教師が常に新しい知識技能を学び続けていくだけでなく、それを主体的に活用していかなければなりません。そのために教育委員会では、教職員研修を従来の知識伝達型から、自身の経験と重ね合わせ、深めていく協議・演習形式の研修への転換が必要であると考えています。そして、各教師は、実践を繰り返し、教育効果等の研究・検証を重ね、自身の専門性を磨いていくことが求められます。以上のことを踏まえ、本市が実施している研修の一例を紹介します。

2 研修の実践

(1) 教育総合研究所の実践例

訪問型研修「これから研修」

本市では、教職員が教科指導や学級経営等に係る自己課題に応じたさまざまな指導法を学ぶために、教育委員会職員及び教科における研究指導員を派遣する「これから研修」を実施しています。研修内容は、主に以下の3つです。

【学習編】

・教科指導のスキルアップや指導改善 等

【コミュニケーション能力編】

・学級経営、教育相談、保護者対応 等

【個別支援編】

・児童生徒一人一人での特性への対応 等

この研修では、受講者と教育委員会職員及び研究指導員で、3つのコースの中から一緒に研修内容を考えていきます。そして受講者は、研修して終わりではなく、研修して得られた気づきや更なる課題を基に、実践を改善します。そして、次の研修で実践の成果を確認します。こ

の営みを継続し、実施することで、学んだ知識と実践が結び付くようにしています。このように、教師自身が学ぶことの楽しさや面白さに加え、同時に指導力の向上を実感することができる研修を目指しています。



これから研修：授業の様子(左)、事後指導の様子(右)

(2) 学校の実践例

「研修主事における校内研修」

今年度より、岐阜県のすべての小中学校において「研修主事」が配置されています。この教師は、学校課題や現場のニーズを基に校内研修を計画し、企画・運営する役割を担っています。

研修主事の取組 (例)

◆どんな研修を受けたいか、アンケートを実施する。

【知りたいこと、学びたいことは？】

- ・学級経営について学びたい！
- ・教科の指導力を高めたい！
- ・ICTのことを効率よく学びたい！ 等



◆効果的・効率的な方法を考え、研修内容を検討・立案し、校内研修を実施する。

【校内研修の工夫 (例)】

- ・校内で、その内容を得意とする教師が講師となり、同僚同士で学び合う。
- ・終礼後にミニ研修を行う。
- ・研修後アンケートを行い、その反省を基に次の研修計画を立案する。

教師自身が自律的・自発的に学び続けることができるように、校内研修の活性化に向けて同僚性・協働性を高めながら、前向きに取り組むことのできる校内研修を目指しています。このように、学び合いの文化の醸成や協働的な職場環境づくりを目指して、日々取り組んでいます。

3 終わりに

今後も、自らの専門性を高めていくために、主体的に研修に取り組む「自ら学び続ける教師」の実現を目指して、子どもたちのために教職員研修の充実を図ってまいります。

(大垣市教育総合研究所 浜田 諭美)

現在、大垣は美しい水が豊富に湧き出ることなどから「水都」と呼ばれていますが、大垣には長く苦しい水との闘いがありました。その長い闘いの後に「水都」として、現在の繁栄があることを忘れてはなりません。

1 水との闘い

明治20年代は、濃尾震災による被害のみならず、何度も大水害にみまわれました。中でも明治29年（1896）には、7月に大水害、8月には暴風雨、9月に再び大水害にみまわれました。



明治29年9月
大垣城天守付近
(大垣市立図書館蔵)

大垣輪中全体が浸水して、大垣城天守の石垣にまで水がきました。街は壊滅的な状態になり、当時の大垣は、「商業振ハズ工業興ラズ、元氣消耗シ生産力欠乏ス」（大垣実業協会趣旨書）と言われる状態でした。

こうした逆境の中でしたが、明治33年の木曾・長良・揖斐三川改修工事により水害は減少し、市民の中からは大垣を復興・発展させようという動きが少しずつ出てきました。「水は害ではなく、むしろ恵（めぐみ）を与えるものである」という発想の転換を行ったのです。

その頃の大垣には、工業発達の良い条件である「天佑・地利・人和」（「大垣商工時報」64号）があるといわれていました。「天佑」とは、水のことです。水は、今まで災害をもたらしてきたものですが、揖斐川の豊富な水を使えば発電ができます。また、自噴水は工業用水にも利用できます。「地利」というのは、大垣付近には広い工場用地があるとともに、交通の便が非常によい場所であることです。「人和」というのは、大垣藩のころより、学問を行い、勤勉な人々が多くいることです。

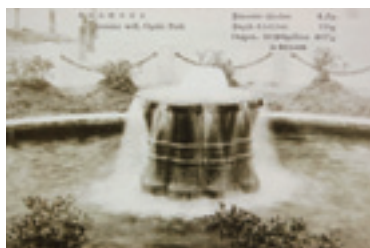
そして、大正時代に入ると、繊維工場を誘致したことにより人口は増加し、市制を施行する中で、大垣は「水」を大きな利点として発展し始めるのです。

2 水都・大垣へ

大垣が美しく水に恵まれた街であることが定着していくのは、昭和初期です。このころ、繊維工場の発展に合わせて、大垣商店街の活動も活発になり、商品祭や国宝になった大垣城のお城まつりなどとともに、水のまつりが行われました。

昭和3年（1928）に大垣出身の理学博士・脇水鐵五郎（わきみずてつごろう）は、大垣市教育会での講演で、次のように述べています。

「大垣ほど清浄なる自噴の井戸に恵まれている所は極めて稀であると言ってよろしい。（略）我大垣の井戸水のように、飲料水としてのすべての美点を具えている完全無欠の井水いうものは、世界広しといえども極めて罕（まれ）なるもので、少なくとも水だけは、大垣の誇（こほり）であります。」（「薬城会誌」101号）大垣の水は、全国的にみても、美しく清らかな水であったのです。



大垣公園内・噴水池
(昭和初期)
(大垣市立図書館蔵)

そして、昭和11年7月10日から3日間、現在の水都まつりの前身ともいえる「水のまつり」が行われました。初日は、大垣公園内に新設された噴水池の前に祭壇を設けて、神官による式典が行われました。式辞では、「郷土大垣は、その清冽にして、しかも豊富なる水により、日常生活に多大の恵沢を受けている…（以下略）」（「大垣商工時報」283号）ことが話され、「大垣商工時報」の記事では、「全市をあげて、本市発展の要素たる水に対し感謝し、水都大垣の幸福を祈る。」としています。これは、「水都大垣」という言葉の初出です。

このように、昭和初期には、繊維工業が発展し、それに大垣の豊富な水が大きく寄与したことから、水に感謝する気運が起こり水都としての意識も高まったのです。

（大垣市立図書館 歴史研究グループ 坂東 肇）

※引用文は、現代かなづかいに直してあります。

「ふるさと大垣科」と私

岐阜聖徳学園大学附属中学校 校長 清水 昭治

1 大垣市の土曜授業のコンセプトに感銘

私が「ふるさと大垣科」という言葉を初めて耳にしたのは、西濃教育事務所の教育支援課長の時、確か平成25年（2013）9月頃のことだったと思います。

当時は、全国的に学力向上のために土曜授業を導入していく流れがあり、岐阜市をはじめ県内の自治体が競って導入しようとしていた時でした。しかし、中にはとにかく10日程度土曜日に授業をやるのが目的になってしまい、内容は学校現場任せで、市としてのコンセプトが見えない土曜授業がいくつもあったように覚えています。

そんな中、我が大垣市は、当時の市長・教育長の肝いりの事業として、「ふるさと大垣について学び、大垣に誇りと愛着をもつ児童生徒を育てる」という明確な目標を実現するために、独自のカリキュラムとテキストを作成、使用して土曜日に授業を行うというものでした。

とても画期的で大垣市としてのコンセプトを明確に感じる内容に、大垣市で育った人間として誇らしく感じました。そして、私自身も社会科教師の端くれとして、子どもたちに自分のアイデンティティを確立することの大切さを痛感していた時期だったので、その趣旨に感銘を受けました。

2 私の懸念

懸念の1つ目は、そもそも土曜日に授業を行うことに、まず児童生徒は理解を示すのだろうか、保護者、市民の理解が得られるのだろうかということです。週休二日が定着し、土曜日に習い事をしている児童生徒も少なくありませんし、スポーツを始め多くの団体が土曜日に活動していました。県や市の行事も多く位置付けられていたからです。

2つ目は、テキストや単元指導計画はどこまで完成しているのだろうか、期限までに完成するのだろうかという懸念です。県小社研などで副読本の編集を担当してきた経験や教科書採択

に携わった経験を踏まえると、テキスト一つ作り上げるのに膨大な時間と労力が必要なことは容易に想像できたからです。今は、働き方改革が推し進められており、先生方の勤務時間の管理がなされていますが、当時は勤務時間の管理という意識がうすかった時代です。大垣市の先生方だけで、学校の教育活動の合間に、資料や名称、内容の吟味、著作権の問題などをクリアするのは間に合うのだろうか、「ふるさと大垣科」のテキストは本当に出来上がるのだろうか、と心配になりました。

3 支援体制（態勢）と大垣市の先生方の底力

私の懸念は、素晴らしいテキストの完成とともに払しょくされました。この「ふるさと大垣科」のテキストは、「市民と先生の意見交流会」でも話題になり、「大人が読んでもとても勉強になる。」「大垣市の良さを改めてテキストから実感した。」「もしも小・中学校在籍中に良さがわからなくても、大人になって読み返すと、このテキストの良さがわかる。」と嬉しいご意見をたくさんいただいたと聞きました。

このようなテキストが出来上がったのは、文教協会という大垣市独自の支援体制（態勢）と当時の教育長の簡単に譲らない強い意志、そして何よりやると決まったらやり切る大垣市の先生方の底力で乗り切ることができたと信じています。

4 持続可能な「ふるさと大垣科」に

数年前、働き方改革により、大垣市でも土曜授業の見直しがなされ、テキストもデジタル化されたと聞いています。しかし、「ふるさと大垣科」に込められた崇高な趣旨や、それを実現した支援体制（態勢）、そして大垣市の先生方の底力だけは、持続して欲しいと願っています。



デジタル化前のテキスト



～ 文教のまち 大垣 ～

文教協会 60周年記念事業に向けて

大垣市文教協会は、令和6年度で60周年を迎えます。50周年記念事業では、『語り継ぎたいふるさと大垣』を発行しました。現在も、子どもたちは、このテキストを活用し、教科として「ふるさと大垣科」を学んでいます。

本事業に向け、学ぶことから行動することへとステップアップするために、「子どもが主人公の『未来のすてきな大垣』づくり事業」を実施していきます。

この事業をとおして、子どもたちがふるさと大垣により愛着と誇りをもてるようにしていきたいと考えております。



臨時理事会の様子

本事業に向け、11月28日に臨時理事会で協議をし、12月4日には、事業の一部にかかわって記者発表をしました。

本事業については、令和6年度の総会にて事業概要を説明させていただく予定です。

(学校教育課 鈴木 宏教)

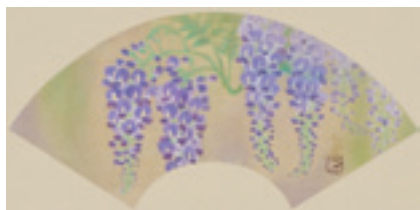


60周年記念事業に関わる募集要項の一部

ふるさと美術散歩⑥ 大垣市守屋多々志美術館を訪ねて



《花源氏》(右隻) 平成14～15年 (個人蔵)



《花源氏》(右隻の右上)より「桐壺」藤

紫式部を主人公とした今年のNHK大河ドラマ「光る君へ」。その紫式部の代表作が『源氏物語』であり、後代に至るまで文学作品や各種芸能、工芸美術などさまざまな分野に大きな影響を与えてきました。

守屋多々志もその一人で、舟橋聖一著『新釈源氏物語』の挿絵をはじめ、歌舞伎の舞台美術、扇面源氏物語 (1991年) などで、何度も手がけ、歴史研究を重ねた画題でした。

その集大成とも言えるべきものが、今回紹介する《花源氏》屏風です。源氏54帖に合わせた風情豊かな四季折々の花や草木を描き、右隻で27枚(帖)、左隻で27枚(帖)の貼交屏風に仕立て直し、王朝文学の世界を表現しました。なお『源氏物語』のそれぞれの帖には「朝顔」や「葵」、「紅梅」など花

の名前がタイトルになっているものも多いですが、この作品ではタイトルそのままの花を描くだけでなく、各帖のストーリーからイメージした花や草木を描いているのが特徴です。

また、制作にあたっては、平安時代に存在しない花、草木を描くことはせず、当時と変わらぬ品種を探して描きました。これには大変苦勞し、屋外を歩き、花屋を訪ね、修業時代の素描を紐解き、2年がかりで完成させたといい、確かな歴史考証を重ねてきた守屋の真髓を垣間見ることができます。

企画展「春の彩(いろどり)」

会期: 令和6年3月16日(土)～5月12日(日)

草花を描き込んだ院展出品作品や、入門間もない頃の花の素描やスケッチなどを展示。

